

[013]言語科学表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/6796037>

出版情報：言語科学. 13, 1977-03. The Group of Linguistic Studies College of General Education,
Kyushu University

バージョン：

権利関係：



ま え が き

言語科学に対する研究の一般的趨勢は、今や言語という共通のテーマをめぐっていろいろな専門分野の人々がそれぞれの角度からアプローチするという方向で、その基礎が確立され、着実にその成果が上げられつつある。「言語」という抽象的表現は、われわれの日常生活からするとやや縁遠い感じがしないでもないが、人間なら誰でも少なくとも一種類の言語を習得し、それを自由自在に使いこなしているのが現実である。言葉を話すという行為はあまりにも当然のことであり、日常生活の中でことさら言語の問題を取り上げるのはいかにもばかげたことのように思われるほどである。それにもかかわらず、多くの人々は言語についてほとんど何も知らない。自動車を運転するのに、ボンネットの下で何が起きているかを知らなくても車を走らせることができるように、言語の構造・機能について無知であっても一種類の言語だけにかかわっている限り、それを理解し使いこなすことにはなんらの支障もないのである。ところが、われわれが自分の習得したものとは違う種類の言語に遭遇したときには、はたと当惑する。今まで自国語に関して学習してきた技能がまったく役に立たなくなってしまうからである。

通信技術の革新、高速交通網の発達等に具現される現代科学の進歩は、われわれの住む国際的な行動環境を狭いものと化した。長い間島国に安住してきたわれわれ日本人にとっても、自ら海外に出かけたり、また海外から訪れる人たちに接したりする機会が多くなるとともに、言葉の面での不便、不自由を身をもって痛切に感じるようになった。元来、言葉というものは人間同士の意思疎通の手段として人間自身が作り出したものであるが、それがいつのまにか人間を離れてひとり歩きするようになってしまったのである。しかし、世界中どこへ行ってもわれわれと同じような形をした人間がいて、仲間同士では通じ合う言葉を使っている。それなのに、われわれがそこへ行くと十分な意思の疎通ができないというのはまことに残念なことである。人間が使う言葉である限り、現象的にはまったく異なった形態をもっていても本質的には共通な部分が存在するはずである。今や言語というものを従来からの枠にとらわれずに素朴な態度でもう一度見直してみる時期にきていると思われる。あらゆる言語における共通性と異質性、その本来の姿を究明することこそ現代の言語科学に与えられた課題ではなかろうか。人間の手を離れてひとり立ちしている言語をもう一度人間の手に取り戻さなければならないと思う。

われわれの「言語科学」も第13号を刊行するに至った。内容も豊富になり、充実したものとなってきたのはまことに喜ばしいことであるが、今後さらに発展を続けていくことを期待してやまない。

1977年2月

佐久間 章